

Newsletter

No.58

DECEMBER 2016



カレドニア(CALEDONIA)はスコットランドの雅名
その国花は薊(あざみ)

サー・ウォルター・スコットに引きつけられた私

佐藤 猛郎

私は昭和六年生まれだから、所謂「昭和一桁」の一人で、会員の皆さんの大部分とは違った環境で育ってきた。昭和二十年の終戦を迎えたのが、旧制中学二年の時、それまでは所謂軍事教育全盛の時代だった。

このような時代だから、小学生時代でもチャンバラごっこが盛んで、男の子は棒切れを振り回して遊ぶのが習慣になっていた。また当時人気の映画の中に、幕末期の勤王の志士を描く「鞍馬天狗」(大佛次郎原作)があり、私達が主演の嵐寛十郎が口を「へ」の字型にして見得を切る真似をして、しきりに口を「へ」の字にしていたのを思い出す。

このような時代だったから、私の読書傾向も時代物が中心で、源義経や弁慶の活躍に夢中になったり、楠正茂や、新田義貞の物語を読んだりしていた。当時私のような時代物愛好少年のための「少年講談」が出回っていて、真田幸村や猿飛佐助、三好青海入道などの「真田十勇士」の物語に、私達は時を忘れて読みふけり、お互いに本を交換したりしていた。

このように時代物を愛好する習慣が、いつか私の身についてしまったのかも知れない。私が大学に入ったのは昭和二十五年だが、一般教養を終えて、英文科生として研究対象の作家を選ぶ時になって、当時アメリカ映画で評判になっていた時代物の『アイヴァンホー』という作品がスコット原作であることを知った。英文科研究室にウォルター・スコットの歴史小説の全集があったことから、その一作目を読み、それが面白かったので、第二作、第三作と読み進めたのだが、どれも私の興味をそそるものだった。卒論に選んだのはスコットの歴史小説の第八作目に当たる『ラマムアの花嫁』だった。これはイタリアの作曲家ドニゼッティのオペラ「ランメルモールのルチア」の原作で、そのドラマチックな展開が印象的だったのを記憶している。

卒業論文の発表会で、当時英文科の主任教授だった福原麟太郎先生に、この作品が明治期に日本に紹介されていたのを知っていますか、と質問されて、吃驚させられた。実は明治十三年(1880)に、橋頭三(実は坪内雄蔵)翻案で、『春風情話』という題名で出版されていたのだった。

卒業してからも、スコット関係の論文を書いたり、作品を翻訳したりすることが私の生き甲斐になり、スコットランドに旅をしては、スコットの作品に出て来る史跡を見学するのを楽しみとするようになり、同好の士が集まっている日本カレドニア学会にも顔を出す

ようになった。

私が最初にスコットの邸宅アボッツフォードを訪れたのは、かれこれ四十数年前になる。当時の所有者はサー・ウォルター・スコットの何代目かの直系子孫に当たるパトリシアさんで、私がスコットの研究書を書いたので、寄贈したいが受け取って頂けるかどうかと、恐る恐る尋ねたところ、大いに喜んで頂き、その時から私とアボッツフォードとのつながりが始まった。手紙のやりとりなどをして、読みにくい手書きの文字に首をひねっているうちに、何とパトリシアさんが日本に来ることになったのである。

これには色々な事情があって、俳優の津川雅彦さんが、スコットの娘婿のJ.G.ロックハートの実家に当たるロックハート家の豪邸を買い取って、それを解体して日本に運び込み、最初は北海道にテーマ・パークを作り、そのメイン・ビルディングにしたかったらしいのだが、色々な事情から、この計画は挫折してしまったという。それに助けの手を差し伸べたのが、群馬県の沼田市に住む建築業の平井良明氏で、彼は沼田から草津まで伸びる日本ロマンチック街道沿いの高山村に、その建材を使って立派な館を再現し、それに「大理石村・ロックハート城」と名付けたテーマ・パークを作ったのだ。そしてそのオープニング・セレモニーに本家筋に当たるパトリシアさんを招待したのだった。そこに私も招かれていたので、図らずも彼女と再会することになった。

その後はアボッツフォードに行くと、いつも大歓迎を受けていた。私の『マーミオン』訳はパトリシアさんに捧げている。彼女が亡くなったのは一九九八年で、その後は妹さんのジーンさんが私どものお相手をして下さった。共訳の『スコット伝』はジーンさんに献呈した。このジーンさんも今は亡く、姉君と一緒に、スコットが眠るドライバラ寺院の墓地に埋葬されている。

(元つくば国際大学)



立教女学院と聖マーガレット

小林 麻衣子

私が勤務している立教女学院は、英語名を St Margaret's School という。この St Margaret という名称は、中世スコットランドの王妃マーガレット (c.1043-93) に由来する。マーガレットは、イングランド王家の血筋をひき、スコットランド王マルカム三世の妃となった人物である。マーガレットとマルカムが出会った経緯については諸説ある。ノルマン征服により、マーガレット一族がイングランド宮廷を追われたためスコットランドに亡命したという説、同じ理由でマーガレット一族がヨーロッパ大陸に逃れようとして乗船した船が大嵐にあいスコットランド海岸に漂着したという説などがある。いずれの説にせよ、マルカムとマーガレットは結婚し、6男2女をもうけた。マーガレットは、敬虔で慈悲深く、孤児、貧者、病者の施しに献身し、スコットランド各地にベネディクト会修道院を建て教会活動の普及に尽力した。マーガレットの功績を称え、1249年にインノケンティウス四世により、マーガレットは聖人に列せられた。祝日は11月16日である。

立教女学院は、アメリカ聖公会から日本に派遣されたチャニング・ムーア・ウィリアムズ主教によって、1877年に現在の文京区湯島に立教女学校として開校し、1879年に現在の中央区築地に移り、St Margaret's Schoolの名称を使うこととなる。聖マーガレットを「女性の鑑」として女子を教育したいという思いが込められて、St Margaret という英語名がつけられた。その後、関東大震災により築地の校舎は焼失したが、アメリカ聖公会から絶大な支援を得て、1924年に現在の久我山に新たな校舎が建てられ、移転した。1932年に聖マーガレット礼拝堂が完成し、礼拝堂は2006年に杉並区の指定有形文化財として登録された。戦後、学制改革により学校法人立教女学院が設立され、1967年には短期大学(英語科)が配置された。

立教女学院の英語名がスコットランド王妃に由来するだけでなく、短大内にスコットランドの雰囲気を感じることができる場所がある。マーガレットの末息子、スコットランド王デイヴィッド一世(在位1124-53)が、エディンバラ城に母マーガレットを偲んでマーガレット礼拝堂を建立したと言われているが、その礼拝堂の中にマーガレット王妃のステンドグラスがある。このステンドグラスを模したものが、短大校舎の5階の会議室にある。このステンドグラスの中央には、マーガレット王妃が位置し、その頭上にはアングロサクソン王家の流れを表す紋章である、クロスフローリーという先端がユリの花になっている十字架にマートレット(岩つばめ、俗名足なし鳥)が描かれている。マーガレットの両脇には二人の女性が刺繍をしている姿が描かれており、これはマーガレットが寡婦に仕事(刺繍)を与え、貧者や孤児の世話をしたことを象徴している。マーガレットの頭上と足元には、スコットランドを象徴するあざみ、イングランドを象徴するバラが描かれている。短大のステンドグラスには、二人の寡婦の両端が付け加えられて、ステンドグラスの背景にある石門の下に立教女学院の校章であるユリが描かれている。

2017年に立教女学院は創立140周年を迎える。

(立教女学院短期大学)

音楽は科学!

菊地 恵子

2016年9月29日、つくば・カミオカンデの本拠地である高エネルギー加速器研究機構(KEK)主催によるKEKコンサート「アイリッシュハーブの文化と歴史〜吟遊詩人ハーブ、アイリッシュハーブ、グランドハーブと共に〜」が小林ホール(2008年にノーベル物理学賞を受賞された小林誠特別荣誉教授の名前を冠した)で開催された。

科学者、特に物理学者には音楽好きが多く、その根柢には理知と情緒の適切なブレンドがあるとか! 楽器を上手に弾ける物理学者は多くいらっしゃる。「物理は学問ではなく、芸術」だそう。

グランドハーブの曲は低音から高音まで走り廻る曲で、血豆が出来るなど大変だった。ただ演奏の時音楽と会話が出来る、どの曲の場合も各指がその音の弦に触れているのを感じ、私の音楽が表現出来ていた様に感じられたのはとても嬉しかった。演奏と話の神経はあまりにも違い、切り替えが大変だった。それにしてもレクチャーと3台のハーブ演奏はとても忙しい。

ただ「スコットランドやアイルランドの音楽は、日本の伝統的な音楽と共通した情趣があり、ハーブはそれを十分に表現できる好適な楽器であることを再確認した。」と御印象を語って頂けたことは、何より嬉しかった。(日本ハーブ協会ノンペダル部門委員長)

学会会員の執筆情報提供のお願い

本学会会員の執筆活動をニューズレターで毎回紹介しております。

スコットランドに関することで著作物がありましたら編集担当へお知らせください。

情報の送り先: 〒422-8526

静岡市駿河区谷田52-1

静岡県立大学 米山研究室

E-Mail: yoneyama@u-shizuoka-ken.ac.jp

会費納入のお知らせ

学会費(5,000円、学生会員は3,000円)を未納の方は、郵便振替にて下記までお振り込み下さい。

郵便振替口座 00230-5-8328 日本カレドニア学会
(8328は右詰めでご記入下さい)

◆2016 年度年次大会報告

本年度の大会は 9 月 10 日 (土) に拓殖大学で開催されました。以前は東京での年次大会は土日の 2 日間での開催でしたが、今回は土曜日だけの開催となりました。

研究発表は 4 本あり、野口結加氏、照山直子氏、村松瞳子氏、坂下拓治氏の 4 人が最近の研究発表をされました。村松氏と坂下氏は新入会員であり、村松氏は日本大学大学院、坂下氏は慶應義塾大学大学院に在学中の若手研究者です。

講演では、佐藤猛郎氏が「サー・ウォルター・スコットに引きつけられた私」という演題でこれまでどのように研究を進めてきたかを話されました。

今回は協賛団体でもある NPO 日本スコットランド協会 (以下、JSS) の会員が 10 名ほど参加してくださいました。佐藤氏が元 JSS 代表理事であり、発表者の野口氏は JSS 会員、さらに坂下氏は JSS の 2013 年度「高橋&ハワット奨学金」奨学生であり、本学会と JSS のつながりが強く感じられました。開会式では JSS を代表して、三鍋昌春 JSS 理事からごあいさつをいただきました。

今回も会場を提供していただいた拓殖大学にたいへんお世話になりました。この場を借りまして心より御礼を申し上げます。

来年度の大会は京都の立命館大学で 9 月 30 日 (土) の開催を予定しています。

(中尾 正史 記)

◎研究発表要旨

スコットランドの食文化に見られるケルト的要素
～その地域性と民族性～

野口 結加

スコットランドの食文化をケルト文化圏という範疇で捉え直し、その影響と変容の過程を考察した。料理は、ケルト起源の岩塩や鉄鍋を利用し、泥炭を熱源に、地元の食材を使ったスープ、ポリッジ、パノックなどが創意工夫された。対極を繰り返して循環するケルトの時間概念は、再生直前の暗闇が新たな始まりとされ、スコットランドでは、大晦日から新年を迎えるホグマニーが重要な年中行事となり、黒いドライフルーツが詰まったブラックパンが闇からの再生を象徴し、日光を象ったショートブレッドを皆で分かち合って祝われた。羊の胃袋にその臓物やオーツ麦を詰めて茹で上げた腸詰め料理のハギスが、山の斜面に棲む動物とされるのは、現世と異界が身近に共存するケルト的世界観の反映と考えられる。こうしたケルト文化の影響が色濃く見られる飲食の光景は、ロバート・バーンズの作品中にも取り上げられ、季節毎の年中行事で愛読朗唱され続け、その民族的、地域的要素が一体化して継承されている点がスコットランド食文化の特徴であるといえる。(上智大学)

江戸時代を見たラナルド・マクドナルド

照山 直子

ペリー艦隊が来日する数年前の 1848 年、遭難を偽装して日本に上陸し、日本で初めての英語教師となった Ranald MacDonald (ラナルド・マクドナルド) を取り上げた。彼の父 Archibald はスコットランド出身、曾祖父は 1692 年のウィリアム 3 世によるグレンコウの

研究ファイル

スコットランドに吹く新たな風

坂本 恵

2014 年 9 月 18 日に行われた UK からの独立を問う住民投票から 2 年が経過した。その間に、英国は今年 6 月 23 日には EU 残留か離脱かをめぐる住民投票を実施し、離脱を決定し、世界に衝撃が走った。しかし当初から予想されたように、スコットランドはすべての選挙区で「残留」が「離脱」を上回った。スコットランド自治政府のニコラス・スタージョン SNP 党首は「スコットランドの人々が EU の一部としての未来を望んでいることがはっきりした」と述べた。この 2 年間、スコットランドが自らの未来を決める大きな転換点に立ってきたことは間違いないことだろう。

スコットランドの UK 離脱の論点としては、①8300 億円 (一人当たり約 17 万円) といわれる北海油田にかかわる税金がスコットランドに還元されていないこと、②ロンドンへの権限の一極集中、雇用の格差、③医療、福祉、社会保障で北欧型社会民主主義政策をとるスコットランド政府と UK の新自由主義による資本主義政策の相違などがあげられる。スコットランド固有の文化や歴史、文学的影響はもちろんとしても、いずれの論点も人々の経済生活に直結する願いでもある。

「経済的自立」が、UK からの独立を考えるうえで重要

なキーワードであるならばそれは、エネルギー政策でもいえることなのであろう。SNP は、2020 年までにスコットランドの再生可能エネルギー比率を 80% を超え、100% を目指すとしている。スコットランドの風の強さは私たちにはなじみ深いものであるが、それを逆手に取った風力発電ファームは、各地にある。特に、エジンバラ東部、グラスゴー近辺に集中し大規模電力消費地をカバーしている。グラスゴー南の「ホワイトリー・ウィンド・ファーム」には 140 基の風車が設置され、発電された電気は 18 万世帯に供給されている (青山貞一・池田こみち「スコットランドの再生可能エネルギー開発」より)。ハイランドの風景の中に立つ風車の群れは、想像よりさほど違和感なく、それはそれで、新しい風景の観を呈しているようにも見える。スコットランド沖では世界最大の洋上風力発電も盛んである。2020 年までに 300 万 kW 以上の洋上風力発電が稼働する計画で、これが実現すると、原子力発電所 3 基分に相当する巨大な規模になるという。

厳しい自然環境の中からこそ生み出されたスコットランドの文学、文化、そして歴史。新しい時代の新たな風の中で芽吹いてくるであろう文学と文化。それもまた楽しみの一つでもある。

(福島大学)

虐殺を生き延びた人であった。1799 年 Thomas Douglas Selkirk が the 5th Earl of Selkirk となると、伯爵はハイランド・クリアランスで窮状に陥った人々を救うべく、彼らの北米大陸移住を計画、Archibald が通訳など統率を任せられた。Archibald はアメリカ原住民チヌーク族の酋長の娘と結婚、生まれたのが Ranald であった。生後間もなく母が他界、チヌーク族に預けられたあと継母に愛情深く育てられ、教育も授けられる。しかし日本への憧れを募らせ、日本近海を通る船に乗り込み、遭難を装って利尻島に上陸したのであった。その後、長崎で収監されるが人柄が好まれ、座敷牢からオランダ語通司たちに英語を教えた。とりわけ優秀な森山栄之助は後にペリー来日時の通訳（オランダ語、英語）として活躍することになる。（亜細亜大学）

The Heart of Midlothian における The Porteous Riots の位置

村松 瞳子

Walter Scott (1771-1832) 作 *The Heart of Midlothian* 『ミドロージアの心臓』(1818)は、1736 年にスコットランドで起こったポータス暴動事件(Porteous Riots)(1736)と、嬰兒殺し事件に巻き込まれた実在のウォーカー姉妹(the Walker sisters)の生涯を題材とした小説である。ポータス暴動事件は、冒頭のみで扱われるが、作品全体の流れを作っている。スコットは、二つの事件を同じ場所から展開させ、嬰兒殺しの事件解決の糸口を、ポータス暴動事件に見出すことで、作品を複雑化している。また、トルブース監獄は、当時 the heart of Midlothian とよばれていたが、heart には、心理的な意味が含まれると考えられる。愛国者として知られるスコットは、イングランド政府に対するエディンバラ市民の不満や憤りを感じていたはずだが、信仰心により、自らのとるべき行動に迷いがあつたのかもしれない。だからこそ、エディンバラ市民の心に同調する heart と、良心に従って行動するヒロインの heart を結び付けることで、自らの意志を示したのである。（日本大学大学院）

スコット？ノルマン？イングリッシュ？12世紀の帰属意識 —ロバート・ブルース1世を例として

坂下 拓治

1138 年のスタンダードの戦いはスコットランド対イングランドであり「新しいスコット人」を示す出来事としてとらえられてきた。しかし、そのような見方は後知恵によるところが大きい。「ケルト的スコットランド」が「アングロ・ノルマン的スコットランド」に変容したことで「先進的なスコットランド」へと変化したというエスニシティに依存した歴史叙述の伝統に引きずられてしまっているのである。同時代の人たちはどのように見ていたのであるか？

12 世紀中葉のリーヴォー修道院長アエルレッドによるスタンダードの戦いの叙述におけるロバート・ブルースによる演説は、そのような歴史の見方の危険性を示している。スコット人の王デイヴィッドはロバートとアエルレッドにとってはノルマン人であり、デイヴィッドはスコットランドを代表してイングランドと戦ったわけではなかった。人と人との関係で緩やかに連合していた時代に我々が持つ民族や国家の見方を無自覚に当てはめることは、実像をゆがめかねないのである。

（慶應義塾大学大学院）

◆2016 年度第 2 回研究会

日時：2017 年 1 月 21 日(土) 15:00 ~ 16:30

場所：拓殖大学文京キャンパス C 館 302 教室
(東京メトロ丸ノ内線 茗荷谷駅下車、徒歩 5 分)

発表者：三原 穂氏 (琉球大学)

論題：社会発展段階説と『オシアン詩』

※今年より会計年度の区切りが 4 月になったため、第 2 回研究会となります。

※Newsletter No. 57 (4 面) には開催日が 1 月 28 日(土)と記載されていますが、21 日(土)に変更となりましたので、ご了承ください。

◆NPO 日本スコットランド協会(JSS)

◇JSS・関西茶会倶楽部 第 8 回

～スコティッシュダンスを踊ろう～

日時：2017 年 1 月 22 日(日) 14:00 ~ 16:00

場所：神戸倶楽部 (元神戸外国倶楽部)

兵庫県神戸市中央区北野町 4-15-1

講師：岡田昌子氏 (英国ロイヤル・スコティッシュカントリーダンス協会公認教師)

参加費：会員 3000 円 一般 3500 円

(紅茶と特製お菓子付き)

申し込み締切：1 月 17 日(火)

◇スコティッシュ・デイ 2017 in Tokyo

～ Shall we Burns?～

日時：2017 年 2 月 12 日(日) 12:00 ~ 15:00

場所：音楽ピアプラザライオン

東京都中央区銀座 7-9-20 銀座ライオンビル 5 階

会費：会員 5000 円 一般 6000 円 学生 3000 円

申し込み締切：2 月 2 日(木)

問い合わせ・お申込み：NPO 日本スコットランド協会
TEL/FAX: 03-6380-5256

E-mail:

協会ホームページ：<http://www.japan-scotland.jp/>

◆日本ケルト学会

◇東京研究会

日時：1 月 21 日(土) 14:30 ~ 17:30

場所：慶応大学日吉校舎 来往舎 2 階 中会議室

報告者：吉田育馬氏

論題：ヨーロッパに残る古代ケルト語の地名とラテン語への借用語 (仮)

問い合わせ：辺見葉子氏

◆イベントのお知らせ

◇日本ハーブ協会主催:レバーハーブ(アイリッシュハーブ)の祭典

日時：2017 年 2 月 19 日(日) 11:00 ~ 16:00

会場：スクエア荏原 イベントホール

東京都品川区荏原 4 丁目 5-28

電話：03-5788-5321

日本カレドニア学会 News letter 第 58 号

2016 年 12 月 8 日発行

編集発行人 日本カレドニア学会代表幹事 照山顕人

<http://www.ne.jp/asahi/caledonia/jcs/>

事務局 〒168-8626 東京都杉並区久我山 4-29-23

立教女学院短期大学 小林麻衣子研究室

Newsletter 編集担当 江藤秀一、野口英嗣、米山優子

(連絡先) 〒422-8526 静岡県駿河区谷田 52-1

静岡県立大学 米山研究室